

～ 音楽鑑賞文ノススメ ～

世の中には多くの感想文コンクールがありますが、「音楽」が対象となるのは稀だと思います。そのため、取り組むことに少し戸惑われるかもしれません。音楽は目に見えず、触れることができないため、その活動や体験を言葉に表すのは難しいです。だからこそとても大切なことだと考えます。聴く楽しみや感動、発見。曲をかたち作っている声や楽器のこと。それはどんな風でどう感じたのか…音で作られた景色を言葉にしてみませんか。

第12回 胡堂・あらえびす大賞 読書と音楽の 感想文コンクール



募集期間 令和8年8月1日(土)～10月31日(土)

【応募資格等】

- ・小学生以上の方であれば、どなたでもご応募いただけます。
- ・児童生徒は、在籍校を通じての応募をお願いいたします。各学校の応募点数に上限はありません。1人1作品であれば、何編でも応募いただけます。

【部門と対象となる音楽、字数等について】

クラシック音楽・伝統音楽部門 クラシック・伝統曲であれば自由

小学校1. 2年生	本文400～800字以内
小学校3. 4. 5. 6年生	本文600～1,200字以内
中学校・高等学校・一般	本文1,200～2,000字以内

3 行 目 ～ 本 文	2 行 目 学 校 名 学 年 氏 名	1 行 目 題	右 側 欄 外 曲 名 と 作 詞 作 曲 者 名
----------------------------	--	------------------	---

【用紙の使い方】

- ✎ 原稿用紙に縦書きで濃くはっきり自筆
- ✎ 用紙の大きさや字詰めは自由
- ✎ 句読点はそれぞれ1字に数える
- ✎ 改行のための空白は字数として数える

※ 一般の応募者に限り、パソコン原稿（ワード）、メールでも応募が出来ます。詳細については、HPをご確認ください。

主催：紫波町教育委員会 共催：NPO 法人野村胡堂・あらえびす記念館協力会 申込・問合せ先：紫波町中央公民館
〒028-3305 岩手県紫波郡紫波町日詰字下丸森 24-2 ☎019-672-3372 ✉ ph_center@town.shiwa.iwate.jp

耳を揺らす 心を揺らす

金子 央

雷が落ちた!

ティンパニが、突然荒々しくF音を連打し始めた。それまで流れていた音に比べて間違いなく最大音量だ。弦楽器群がそれに負けじとかき鳴らすのだが、バランスのことなど構いなしに叩き続ける。あれ? F音だと思ふのだが、音がずれている? チューニングを無視しているかのような、周囲と調和しない音になっている。リズムもどこか不規則になっているように感じる。音空間が一変して、一瞬パニックになった。雷が落ちた、本当にそう思った。

ベートーヴェン作曲の交響曲第六番「田園」第四楽章「雷雨、嵐」。それまで、穏やかな田園風景を思わせる穏やかな音楽が続いていたのだが、突然その雰囲気やかな破るような轟音がした。第三楽章「田舎の人々の楽しい集い」から間を空けずに演奏されるので、余計に突然のように感じたのかもしれない。啞然としているうちに、聴き覚えがある旋律が流れ、また穏やかな音空間に戻ってきた。第五楽章「牧歌 嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」だ。しかし、あの雷が耳の奥に強く残り、演奏が終わった後も、「あれは何だったんだ」という思いをしながら会場を後にした。

実は、私はこれまで「田園」をきちんと聴いたことがなかった。有名な旋律を断片的に知っているだけだった。そんなある日、地元のホールにオーケストラアンサンブル金沢(OEK)が来て、広上淳一氏の指揮で「田園」が演奏されることを知った。ここは敢えて予習をせず、新鮮な気持ちで楽曲と出合ってみようと考え、コンサートに出かけたのだった。予備知識がなく第四楽章に接したことも、驚愕した一因だろう。

あの有名な旋律で始まる第一楽章「田園に到着したときの愉快な目覚め」。OEKの弦楽器群は流石のアンサンブルで、「このホールってこんなによく響いたっけ?」と思うほど、豊かで美しい音色が客席を包んだ。第二楽章「小川のほとりの情景」で鳥の鳴き声を模した木管楽器など、管楽器群も弦楽器と寄り添うかのようにやわらかな表現を続けていた。広上氏のタクトは、踊るような動きで、オーケストラを流暢に歌わせているかのようだった。ああ、今とても贅沢な空間に身を置いているなあ、と思ひながら聴いていた。そこへあの衝撃だった。

しかも、このティンパニストは前のプログラム(ベートーヴェン作曲 ピアノ協奏曲第五番「皇帝」)では独奏ピアノや弦楽器群と弱音で丁寧な掛け合いをするなど、非常に繊細なアンサンブルをしている様子が印象に残っていた。このギャップもすごかった。そう考えると、「田園」を演奏する前からの、この場面向けての布石だったのではないかとも思えてきた。

後日、会場にいた友人たちと感想を交わしたが、あの雷の音でビクツとなった聴衆が結構いたようだ。それだけの衝撃だった。きっと私も周囲の人に分かるほどビクツとなっていたに違いない。

さて、コンサートを終えてから、どうしても気になり、CDで「田園」を聴いてみたくなった。違う指揮者の演奏で数枚鑑賞したが、どれも「あの日ほどのエネルギーではない」と感じてしまった。もちろんどのCDも表現力はあるのだが、弦楽器や管楽器とバランスをとって録音しているように思えた。あのパフォーマンスは、それこそ「ライブ」だった。視覚的要素や効果音ではなく、音楽のみでここまでリアルな表現と出合えることはなかなかない。私は、大げさでなくホールで「大自然」を感じた。観光で絶景を見た時に感じる、ある種のエネルギーのようなものを感じ取った。

つまり私は、オーケストラのつくる音空間によって、耳を揺らされ、そして心を揺らされたのだ。田園の風景を描いた心地よい響きが耳に届き、心を穏やかにする。突然の嵐が起る衝撃的な響きが耳に伝わり、心がざわつく。そのリアリティが感情を動かすのだ。

そう考えると、そういったことを狙って作曲したベートーヴェンのすごさ、それをもとに計算し尽くしてパフォーマンスを構築した指揮者と奏者のすごさを改めて感じた。OEKは決して大きなオーケストラではない。にもかかわらず、こんなにも振れ幅の大きい音楽表現に出合うことができ、貴重な経験ができた。

自分も時折演奏する側に携わることがあるが、聴き手の耳を揺らし、心を揺らす表現ができていくだろうか、という視点でこれまでの活動を振り返ってみると、まだまだ考慮する余地がたくさんありそうだ。

さあ、また耳を揺らし、心を揺らし、今までにない感情と出合えるような演奏に接することにしよう。今度は何を聴きに行こうか。

曲名 交響曲第六番 田園
作曲 ベートーヴェン

時代を越えて生きる歌

矢巾町立矢巾北中学校 三年 松本 早紀

私がこの歌を初めて聞いたのは、中学三年生になってからの音楽の授業でした。作詞江間章子、作曲團伊玖磨でどちらも知っていましたがこの歌は知りませんでした。

「花の街」

この題名を見て、私はお散歩の風景かなと思っていました。しかし江間章子の言葉を読むとともに深い歌だということが分かりました。「花の街」は幻想の街だったのです。戦争が終わり平和が訪れた地上は悲惨な光景が広がっていました。だから平和という名から生まれた美しい花の街を作ったそうです。私はこの歌を聞いて初めて歌の力で泣きそうになりました。私の人生の中で最も響いた曲です。

まず、やわらかくて優しい子守歌のようなへ長調で前奏が始まります。スツと入ってくる優しい和音と流れるような音階があり、また後半部分の三連符が哀愁を感じさせます。前奏が長いのは、長くすることで聴く人を一気に戦後の世界へ引き込むためだと思います。

この歌の最大の特徴は、ほとんどのフレーズが八分休符で始まるということです。一拍目から音を入れて歌ってみると童謡のようになってしましますが、八分休符を入れることで大人っぽさや奥深さが増し、悲しさを表現する効果があると思いました。

一番は、江間章子が理想とした街が描かれていると思います。

「七色の谷を越えて 流れていく 風のリボン」

の部分、当時軍国主義だった日本が縛られていた戦争というものから解放された情景が想像されます。自由になった喜びから、「駆けていったよ」にしたのだと思います。

二番は最も具体的な花の街が描かれています。「美しい海」とは平和な海のこと、戦争なんて関係なく穏やかな海を見て戦前の風景を思い出しているのだろうなと思いました。季節の移り変わりを楽しみながら過ごしていた様子が思い浮かびます。春が来た、と喜んでいた頃を懐かしんでいるのかもしれない。

三番は一番悲しくて、幻想の世界から急に現実を引き戻される歌詞です。戦時中は明かりが外へ漏れないようにガラス窓に墨を塗ったり黒いカーテンで遮るなど、していたことから「すみれ色してた窓で」という表現になっていたそうです。

「泣いていたよ 街の角で」

というところは、ケガを負った人やその家族が泣いていた、あちらこちらに亡くなった人がいるのが頭に浮かびます。三番は、「輪になって」の後、初めて動作ではなく「春の夕暮れ」という情景が表れます。戦争によって悲しんでいるのは人々だけでなく、自然も悲しんでいるということなのかなと思いました。

一番、二番、三番に共通しているところは、
「輪になって 輪になって」

です。同じ言葉を二回繰り返すと、強調される効果があります。なので、みんなが傷付くだけの意味がない戦争はもう終わりにして仲良くしよう、という切実な願いが込められていると思いました。

最後の一小節の伴奏はアルペジオで終わります。和音ではなくアルペジオにすることで、幻想の「花の街」が光となって消えていく、夢から覚めるような感じになっていると思います。

人が生きていくために音楽は必要ありませんが、人が人らしくあるために音楽は欠かせません。戦時中は生きるために必死だった人々が戦後に求めたのは、心の傷を癒やしてくれるものだったのではないのでしょうか。そして人々は音楽から元気をもらっていたのだと思います。「花の街」は、戦争を忘れず、前を向いて一生懸命生きていこう、と言っているように感じます。音楽は時代を語るものであり、いつも私たちに生きる希望を与えてくれるものなのだと思います。

曲名 花の街
作詞 江間 章子
作曲 團 伊玖磨

☆ 入選作品の紹介

令和6年度「第10回 胡堂・あらえびす大賞」クラシック音楽部門 小学校の部 あらえびす賞

ぼくとノクターン

赤石小学校 六年 神 壮哉

曲名は知らなくてもきいたら「あー知ってる。」と言うショパンの名曲の一つ「ノクターン」。この曲は、夜の静けさを表現したピアノの曲で、ショパンというポーランドの作曲家が作りしました。「ノクターン」という言葉は「夜想曲」ともよばれていて、夜のしずかな時間にぴったりの音楽です。

ぼくが「ノクターン」に出会ったのは、ピアノをはじめたばかりの時です。ねる時にユーチューブでクラシックをかけてねるのが好きで、その中でも「ノクターン」はぼくの頭の中に残っていて目をしてきいていると、「ボワンボワン。」

と、あったかくて優しく心がおちつく感じがしました。

ぼくが一番印象に残ったのは、曲の中にあるゆっくりからはやくなったり、おそくなったりする切り替えの部分です。色々な曲にこういった表現があるけれど、音色が美しく聞こえる感じがとても気持ちがいいからです。真つ暗な部屋できくとわかります。

ショパンは、この曲で夜の静けさや心の中の色々な思いを表現していると思います。ねる時にきくと、心がスッキリします。モヤモヤしているのがスーっとなくなりました。

ぼくはこの「ノクターン」を今年弾く機会がありました。先生から誘っていただき「ミニコンサート」で弾きました。

ふだん家でよくきいていたけど、いざふ面をみるとできるかなあとドキドキしました。でも弾いていくうちにショパンはなんでここを弱くしたのかなあと、だからここがはやいのかも、もつと「ノクターン」の事を知ることができ、もつと好きになりました。本番で弾いた後、バイオリンの先生から、

「すごく伝わってきて感動した。これから音楽を楽しんで続けてね。」

と言われ、とてもうれしかったです。

この曲を通して、ぼくは音楽のすばらしさを改めて感じる事ができました。音楽はきいて楽しむだけではなく、心の中で色々おもしろくくれるものです。ショパンの「ノクターン」も大好きですが、ぼくはもつと色々な作曲家の事も知ってみたい、弾いてみたいと思いました。もつとクラシックが好きになりました。

ぼくにとって「ノクターン」は数多くの曲の中で特に大切な一曲です。

これからも毎日一回は弾いてもつと「ノクターン」を知りたいと思います。

今ポップスが人気だし、良い曲もたくさんあります。けれど、聞くと知っている人が多いクラシックには、それだけ魅力があります。「ノクターン」をはじめとしたクラシックがぼくはやっぱり好きです。そんなクラシックとぼくは、人生において大切なものにこの先もなっていたいです。

曲名 ノクターン（夜想曲）
作曲 フレデリック・ショパン

令和7年度「第11回 胡堂・あらえびす大賞」クラシック音楽部門 小学校の部 あらえびす賞

アフリカンシンフォニー

赤石小学校 五年 伊藤 仁香

わたしは、学校の音楽の時間に、ショスタコービチ作曲の「祝典序曲」と、ヴァン・マッコイ作曲の「アフリカンシンフォニー」という曲を聴きました。「祝典序曲」はオーケストラ、「アフリカンシンフォニー」は吹奏楽です。オーケストラは、管楽器と打楽器と弦楽器で演奏し、吹奏楽は、管楽器と打楽器で演奏するそうです。

二つの曲を聞き比べてみると、オーケストラは、音に広がりがあり、厚みのある響きが大きな風景を感じさせてくれました。吹奏楽は、管楽器や打楽器の響きが重なりあって、明るくてチームワークを感じさせてくれました。

鑑賞をしているときに、クラスの男の子が、「この曲、甲子園の高校野球の応援で聴いたことがあるよ。」

と言っていました。

二つの曲を聴き比べて、わたしは「アフリカンシンフォニー」がとても印象に残りました。いろいろな想像をしながら、何度も何度も聴きました。

まず、わたしの頭の中に浮かんだのは、たくさん動物たちが主人公の周りに集まってくる様子です。わけは、最初はリズムが遅いのですが、だんだんと速くなり、動物たちが次々と集まっているような感じがしたからです。ライオン・キングがいるような、広い草原を想像しました。

次に想像したのは、森の中です。くり返しのリズムがあって、主人公が森の中にどんどん歩いて行くような感じがしました。

また、楽器の音が重なり合うところでは、ジャングルの中で動物たちが鳴いている感じがしました。低い音はゾウが仲間と話している場面、高い音は馬と鳥と一緒に遊んでいる場面を思いうかべました。そして、音が強くなるところは主人公が森の中を走っているところ、弱くなるところは、海を目指してゆっくり歩いているところを想像しました。

最後の方は、たくさん楽器の音が重なって、音の響きも強くなりました。わたしは、たくさん動物たちが主人公の周りに集まっている場面を思いうかべました。そして、くり返されるメロディーで、何かに挑戦しているような感じがして、勇気がわいてきました。

わたしは、この曲を何度も聴くうちに手や足でリズムを取っていました。「アフリカンシンフォニー」は大人でも子どもでも楽しめる曲だと思います。それは、いろいろな楽器やリズム、音の大小で、アフリカの大自然を想像させてくれるからです。自然の偉大さや、そこに生きる動物たちの力強さ、仲間の大切さを感じさせてくれました。

この曲を聴けば、きっと、誰でもぼうけんの旅に行きたくなると思います。

曲名 アフリカンシンフォニー
作曲 ヴァン・マッコイ